

論文

尖閣諸島に関する中国史料の研究(四)

—古地図リサーチを中心に—

Chinese Historical Records Relating the Senkaku

Islands (IV) : A Research on Antique Maps of China

班 偉<sup>1)</sup>

Han I

キーワード：尖閣諸島、釣魚嶼、輿図、坤輿全図

Key Worlds : The Senkaku Islands, Diaoyu Yu, Terrestrial Map, *Kun Yu Quan Tu*

はじめに

尖閣諸島関連の中国史料として、海道針經・使琉球録・明代海防書などの古文書の他に、古地図の存在も無視できない。とりわけ、汗牛充棟とも言える明清輿図の中に含まれている、「釣魚嶼」「釣魚台」を描いた数種の古地図は、釣魚島の領有権を主張する中国・台湾側からすれば、利用価値の高い「歴史的証拠」になるわけである。しかし、史実は中台側の都合通りには行かず、明清一統志や台湾地方志の附図をはじめ、古地図の殆どは釣魚島の表記が欠如しているのだ。本稿では、中台側が長年「三種の神器」として利用してきた「琉球三省并三十六嶋之図」「坤輿全図」『皇朝中外壹統輿図』の三図に焦点を絞って、尖閣表記の実態を解析した上、近現代中国・台湾発行の地図における尖閣表記の検証を通して、尖閣諸島にまつわる史実の一端を明らかにしていきたい。

一、「琉球三省并三十六嶋之図」の色分けについて

「琉球三省并三十六嶋之図」は、江戸時代の仙台藩士林子平（1738～93）が1785年に刊行した著書『三国通覧図説』の附図である。中国の古地図ではないが、井上清『尖閣列島——釣魚諸島の史的解明』（1972年）の中で取り上げられたことから、中台の論客が好んで受け売りする「論拠」の一つとなった。その言い分として、「この地図は色刷りであって、……日本の鹿児島湾附近からその南方のトカラ列島までを灰緑色に塗り、奇界（鬼界）島から南、奄美大島、沖縄本島はもとより、宮古、八重山群島までの本来の琉球王国領は、薄い茶色に塗り、西方の山東省から広東省に至る中国本土を桜色に塗り、また台湾及び澎湖三十六島を黄色に塗っている。そして、福建省の福州から沖縄本島的那覇に至る航路を、

<sup>1)</sup>山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

北コースと南コース二本描き、その南コースに、東から西へ花瓶嶼、彭佳山、釣魚台、黄尾山、赤尾山を連ねているが、これらの島はすべて中国本土と同じ桜色に塗られている。故に、「この図により、林子平が釣魚諸島を中国領と見做していたことは、一点の疑いもなく、一目瞭然」である<sup>(1)</sup>。さらに、「林子平のこの地図は、中国が釣魚台列嶼を領有していたことの不動の証拠であり、……当時日本朝野人士の間で一種の共通認識となった」と拡大解釈された<sup>(2)</sup>。尤もらしい言い方のように聞こえるが、「歴史的虚構」も甚だしい。

そもそも『三国通覧図説』というの、江戸時代の日本に隣接する三か国——朝鮮・琉球・蝦夷（北海道、樺太及び千島列島）に関する地理概説書で、「天明五年秋東都須原屋（日本橋北室町三丁目）市兵衛梓」と記して最初に出版され、巻末に「三国通覧輿地路程全図」「朝鮮八道之図」「琉球三省并三十六嶋之図」「蝦夷国全図」「無人島大小八十餘山之図」など五つの附図が添付している。そのうちの「琉球三省并三十六嶋之図」は、『三国通覧図説』の序文に「此数国の図は小子敢えて杜撰するに非ず、……琉球は元より中山伝信録あり、是を証とす」と記している通り<sup>(3)</sup>、清朝琉球冊封使を務めた徐葆光の『中山伝信録』（1719年）にある「琉球三十六島図」「針路図」を手本に作成されたものであるが、問題は林子平が果たして清日琉三国の版図・領域を区別しようと意図的に色分けしたかどうかだ。

林子平地図の構図と着色を吟味すれば、井上説には重大な欠陥があることに容易く気付くはずである。確かに、「釣魚台」「黄尾山」「赤尾山」は山東・南京・浙江・福建・広東など中国本土と同じ桜色に塗られている。しかしその一方で、台湾と澎湖列島は黄色に色分けされた。もし「同じ国の領土だから同じ色」の理屈が通用するなら、林子平が「台湾も澎湖も中国領でない」としたという結論になるのだが、「台湾三県之図」と名付けられた図面をよく見ると、「諸羅県」「台湾県」「鳳山県」「鷄籠城」「淡水城」「赤嵌城」「安平城」などの地名だけでなく、周辺に「鷄籠山」「小琉球」「北線尾」までちゃんと書き込まれており、澎湖列島に「澎湖三十六嶋」と記されている<sup>(4)</sup>。周知の通り、台湾は康熙二十三年（1684）に福建省の府の一つとして清朝に併合された際、台湾府の下に「台湾」「鳳山」「諸羅」の三県が設置された。つまり、林子平は「百年前、台湾が中国領となった」ことを熟知し、自作の地図にそれを正確に表記したわけである。にも拘らず、彼が中国と台湾を色分けしたのはなぜだろうか。そもそも、「釣魚台」を含む台湾周辺の島々（花瓶嶼・彭佳山も含めて）が台湾と異なる色に塗られたこと自体は、何より「釣魚島は台湾の附属島嶼」という中台側のもう一つの主張に背くものではないか。

辻褄の合わないこの疑義に対して、中台の論客が長年不問に付してきたが、井上清の「推定」も相当無理がある。「彼（林子平）は台湾は中国領であっても本土の属島ではないと見て、ちょうど小笠原島が日本領であっても九州南島などのように本土の属島とはいいがたいので、本土とは別の色にしたのと同じく、台湾をも中国本土やその属島とは別の色にしたのではあるまいか」と井上がくどくどと弁解するが<sup>(5)</sup>、考えてみれば、幅約150キロの海峡を挟んで大陸と向き合う台湾、元朝至元二十九年（1292）に巡検司を設置された澎湖列島を中国本土の属島と見做さない半面、台湾の北東から更に170キロも離れている無人島の尖閣諸島だけを中国本土の属島と見做すとは、果たしてあり得ることだろうか。第一、福建近海に浮かぶ島「定海所」「東沙」も台湾と同じ黄色に塗られているのだ。

もう一枚の附図「三国通覧輿地路程全図」と見比べれば、井上説の馬脚が益々露呈してしまう。北東アジアの広域を網羅した地図では、台湾が朝鮮半島と同じ黄色、満州・女鎮

(女真) 辺りが日本と同じ灰緑色、そして中国本土はロシアやカムチャツカ半島と同じ桜色に塗られている。尖閣諸島に繋がる弓状列島も桜色となっているが、「花瓶嶼」「彭佳山」「釣魚台」「黄尾山」「赤尾山」といった島名が特に記されていない<sup>6)</sup>。中台側の理屈に従って言えば、台湾は朝鮮領、満州（中国の東北地方）は日本領、中国本土はロシア領だと林子平が見做していたということになろう。林子平が尖閣諸島に中国本土と同じ色を付けた理由は不明だが、恐らく『中山伝信録』の影響を受け、自著の地図に明清冊封使の船が辿った福建－琉球航路を明確に示すためではないかと推察する。現に二本の航路のうち、往路の南コースに「此海路四十更船、日本道二百四十里」、復路の北コースに「此海路五十更船、日本道三百里」と航程・距離を書き添えている。「琉球三省并三十六嶋之図」において、福建－琉球の間だけでなく、大陸－台湾、日本－琉球、日本－朝鮮、日本－小笠原諸島、那覇－宮古島・八重山の間でも航路を示す点線が引かれていることを付言しておく。

ついでに言えば、江戸時代後期において、林子平は海防論の先覚者として人気を博し、『三国通覧図説』及び附図の抄本や模写本が何種類も出回っていたが、中には単色のものも少なくない<sup>7)</sup>。一例として、岡山大学図書館所蔵の写本『三国通覧図説』を調べたところ、巻末に「接壤略図」が添付されており、「三国通覧與地路程全図」をアレンジしたものと思われる。そこには、「韃靼の地」（ロシア）とカムチャツカ半島は薄灰色、蝦夷、朝鮮、琉球は薄茶色に塗られているが、日本と中国は無色。福建と琉球を結ぶ航路を示す一本の点線に「二百四十里」と記し、標識島の図形も名前も欠落している<sup>8)</sup>。このように、林子平をはじめ近世の学者たちは、尖閣諸島の帰属を意識して色彩を塗り分けたわけではなく、単に福建－琉球航路を示すために着色したのではないかと考えられよう。

実は、井上説を嘲笑うような古地図は現存している。北京図書館所蔵「封舟出洋順風針路図」は、乾隆二十一年（1756）頃に製作された彩色絹図で、絵師佚名だが、構図や針路記述から『中山伝信録』の「針路図」を模写したものと思われる。林子平の地図と対照的で、福建・浙江など中国本土は橙色、尖閣諸島を含めて冊封使の船（封舟）が通過した島々はすべて琉球と同じ藍色に塗られている。就中、往路の南コースに位置する東沙・澎湖・鶏籠山・台湾・花瓶嶼・彭佳山、復路の北コースに位置する南杞山・鳳尾山・魚山・臺山・里麻山など、明らかに清朝の版図に属する島まで藍色となっている。興味深いことに、台湾島の西半分は橙色、東半分は藍色に塗られている<sup>9)</sup>。清朝宮廷絵師が描いた地図でさえ、このような着色を施しているので、古地図の色分けは必ずしも版図・領域の区分を意味しているわけではないと言えよう。

最後に強調したいのは、「琉球三省并三十六嶋之図」そのものの杜撰さである。図面をよく見ると、台湾のサイズは琉球本島の三分の一程度に過ぎず、形も実状に全然合わない。姑米山（久米島）と馬齒山（慶良間諸島）が福州－那覇航路から遠く外れてしまい、前者は琉球本島から宮古島・八重山へとつながる航路の中継島として描かれている。もっと驚くことに、琉球国は未だに「中山」「山北」「山南」の「三省」に分けられている。中山王尚巴志が1416年に北山王を、1429年に南山王を相次いで滅ぼして琉球を統一したのは、『三国通覧図説』の刊行より356年前の出来事だったにも拘らずだ。それより、幕府老中松平定信の「寛政異学の禁」（1790年5月24日、『三国通覧図説』の刊行から僅か5年後）、により、林子平の著書として、『三国通覧図説』は『海国兵談』とともに発禁処分となったため、「当時日本朝野人士の間で一種の共通認識」とは所詮ナンセンスだ。

## 二、「坤輿全図」及び欽定輿図の島名表記

「坤輿全図」とは、清乾隆帝生誕五十年を祝賀するために、フランス人のイエズス会士蒋友仁（Michel Benoist、1715～1774）が1760年に製作、献上した世界地図である。これは両半球装飾の見開き地図で、東半球図を見ると、台湾と琉球の間に「彭嘉」「華賓須」「好魚須」「權未須」「車未須」の文字が見える<sup>(10)</sup>。中国論客の理屈によれば、閩南語では「嶼」と「須」が同じ Xu と発音し、島名の当て字として「彭嘉」→「彭佳」、「華賓須」→「花瓶嶼」、「好魚須」→「釣魚嶼」、「權未須」→「黄尾嶼」、「車未須」→「赤尾嶼」とそれぞれ対応している。『春秋公羊伝』に「名従主人」とあるように、これらの島々の名称が閩南語の発音で表記されたことは、福建省の属島であることを立証している。それに、蒋友仁は「大清一統輿図」の製作に携わったので、彼の「坤輿全図」は皇帝の御覧図として扱われた以上、釣魚島が清朝の版図内に入っていたことを示す証拠になるという<sup>(11)</sup>。

ここで、先ず「大清一統輿図」（1761年）の成立経緯を見てみよう。これは、乾隆帝主導の下、康熙帝欽定「皇輿全覽図」（1718年）と雍正帝欽定「皇輿全図」（1723年）を基に製作された全国地図であり、「乾隆十三排図」という俗称を持つ<sup>(12)</sup>。いずれも勅令を受けて作られた清朝の疆域図で、当時の中国版図・領域を示す確たる証拠と言えるが、三つとも尖閣諸島・南海諸島を表記せず、「大清一統輿図」の81図「福州府、金華府」において、台湾の北端に「花瓶嶼」「鷄籠城」と記されているだけである。この「不都合な真実」について、中国側がまたしても苦しい言い訳をした。曰く、『大清一統輿図』はアジア大陸の地理に重点を置くため、中国の東南諸島、台湾の属島である釣魚嶼、南シナ海の東沙諸島・西沙諸島・南沙諸島などはもちろんのこと、琉球や日本の表記も省いた。というのも、蒋友仁が先立って乾隆帝に献上した『坤輿全図』において、すでに記しているので、製版の際に図幅の関係で省略した」云々<sup>(13)</sup>。

全く筋の通らない強弁だ。「坤輿全図」というのは所詮、一外国人宣教師が個人の方で作った世界地図であるのに対し、「大清一統輿図」は皇帝の威信をかけて御用学者グループで奉勅製作した自国地図である。前者に琉球・日本・釣魚島を描いたからと言って、後者において自国領の表記を不要とする理由にはならないはずだ。「大清一統輿図」では、「庫葉島」（サハリン）「咸興」「巨濟」（朝鮮）まで描いたにも拘わらず<sup>(14)</sup>、尖閣諸島も南海諸島も表記していない事実について、「製版上の都合」では説明が付かない。清朝の領土かどうかを判定するには、「坤輿全図」ではなく、「大清一統輿図」を根拠とすべきだ。

注目すべきは、蒋友仁の「坤輿全図」が利馬竇の「坤輿万国全図」と南懷仁の「坤輿全図」を手本に作成されたという事実だ。利馬竇（Matteo Ricci、1552～1610）と言えば、明萬曆皇帝に仕えたイタリア人のイエズス会士として知られ、彼が1602年に製作、献上した「坤輿万国全図」は中国初の世界地図と言われている。その図面を確かめると、福建と向き合って、「大明海」（東シナ海）に浮かぶ島「大琉球」「小琉球」「東寧」（台湾）が描かれているが、釣魚島の影など見当たらない<sup>(15)</sup>。一方、南懷仁（Ferdinand Verbiest、1623～1688）は清順治帝と康熙帝に仕えたベルギー出身のイエズス会士で、彼が1674年に製作した「坤輿全図」には「大琉球」「小琉球」の代わりに「台湾」だけが描かれている<sup>(16)</sup>。蒋友仁の大先輩に当たるこの二人をはじめ、他の宮仕えの西洋人宣教師が作った多種多様の地図も中国皇帝への献呈品でありながら、いずれも尖閣諸島を載せていない。

では、蒋友仁はなぜ自作の地図に尖閣諸島を書き込んだのか。本来の目的は不明だが、

恐らく宣教師仲間宋君栄の影響ではないかと推察する。宋君栄 (Antoine Gaubil, 1688～1759) も乾隆帝に仕えるフランス出身イエズス会士の一人だったが、1752年に徐葆光の『中山伝信録』をフランス語に訳し、ヨーロッパに紹介した人物でもある。彼の訳書には、『中山伝信録』の「琉球三十六島図」「針路図」を基にした「琉球諸島図」が添付され、そこに福建-琉球航路に点在する「釣魚台」などの島嶼が描かれている<sup>(17)</sup>。宋君栄と蒋友仁は懇意の間柄で、共に「大清一統輿図」の作成に携わったこともあり、蒋友仁は「坤輿全図」を作る際、宋君栄に相談したり、「琉球諸島図」を参考にしたりしたことが十分考えられる。「閩南方言の発音」かどうかは定かでないが、宋の地図で釣魚嶼に Tiaoyusu、黄尾嶼に Hoangouveysu、赤尾嶼に Tchehoveysu とローマ字で表記されたところ、蒋の地図では、それぞれ「好魚須」「權未須」「車未須」の当て字を当てられたのであろう。それにしても、「坤輿全図」では、「福州」「興化」「泉州」「漳州」「台湾」「小琉球」「彭嘉」といった福建・台湾の地名がすべて標準語で表記されているのに、なぜ尖閣の名称だけが閩南方言の発音で記されたかと断言できるのかという疑念は残るが、中台側が一向意に介しない。

他にも留意すべき点が二つある。一つは、福建沿岸の島々や台湾の属島である火烧嶼 (緑島)・紅頭嶼 (蘭嶼) など、尖閣諸島より遥かに大きいにもかかわらず、蒋友仁の地図に登場しない島が幾つある。つまり、彼の地図に書き込まれた島はすべて中国領で、書き込まれなかった島は中国領でないとは言い切れない。もう一つは、図面には一本の点線が広州湾から巴士海峡を横切って台湾島の東を廻り、更に「華賓須」と「好魚須」の間を抜けて北上し、「大島」(奄美諸島)の北端を通過して太平洋へと続いている。明らかに清代の貿易船の航路を示すものだ。蒋友仁は先輩宣教師の地図を手本にして清日琉三国間の航海経路を示すために、要所である尖閣諸島の位置に着目したのかもしれない。いずれにせよ、蒋友仁の「坤輿全図」は、宋君栄の「琉球諸島図」を介して間接的に『中山伝信録』『針路図』の影響を受け、尖閣諸島を中国領ではなく、あくまで標識島として記したに違いない。

要するに、明清の版図・領域を判定するには、「皇輿全覽図」「皇輿全図」「大清一統輿図」といった欽定輿図や、正史『一統志』『会典』の輿図を根拠とすべきだ。宣教師・文士個人で作った地図より、お抱えの朝廷学者集団が奉勅製作した地図の方が遥かに権威あり、信憑性が高いに決まっている。以下、正史の輿図を幾つか取り上げて参照してみよう。

先ず、『大明一統志』(天順五年、1461)を繙くと、巻頭に「大明一統之図」、巻之七十四に「福建地理之図」が見える。前者には「日本」「琉球」が描かれているが、釣魚島どころか、「台湾」すら表記されていない。後者においては、福建省陸地の部分だけで、地図の外枠に「東抵海」「東南抵海」「南抵海」と明記している<sup>(18)</sup>。「明代において、釣魚島はすでに中国の支配・管轄下に入っていた」との主張が事実であるなら、『大明一統志』に記載されないはずはない。また、『乾隆大清一統志』(乾隆四十九年、1784)には「皇輿図」「福建統部図」「台湾府図」の三図があるが、「皇輿図」を見ると、中国周辺に「俄羅斯」「朝鮮」「日本」「琉球」「安南」などの国名が記され、中国の属島として円線で囲まれているのは「崇明」「台湾」二島のみである。「福建統部図」「台湾府図」では、台湾は島の西部しか描かれておらず、最北端に「鷄籠城界」と記している<sup>(19)</sup>。当時、清朝の支配範囲はまだ台湾海峡に面している平地帯にしか及ばず、そのため、「台湾府図」の中央に「咬狗溪大脚山界」と明記しており、釣魚島の影はどこにも見当たらない。更に、『嘉慶重修一統志』(道光二十二年、1843)を繙くと、「皇輿全図」「福建全図」「台湾府図」三図のうち、「皇輿全

図」には日本や琉球など存在せず、「台湾」「澎湖」だけが描写された。「福建全図」と「台湾府図」では、やはり台湾の西部しか描かれず、最北端に「鷄籠城」と記し、後者の中央に「東境俱内山生番界」と書き込まれている<sup>(20)</sup>。

一方、『正徳大明会典』（正徳六年、1511）は輿図が載っていないが、『欽定大清会典』（乾隆二十三年、1758）巻六十三「兵部職方清吏司」には、「皇清一統輿地全図」及び各省、周辺藩部の地図を収録しており、調べれば清朝の領域と行政区の範囲は一目瞭然だ。「皇清一統輿地全図」には台湾が描かれているが、「福建全図」「台湾全図」では、台湾島の全形が漸く現れたものの、東部は未踏の地として空白になっており、「生番」と記している。最北端に「基隆」「鷄籠城」「花瓶嶼」「燭台嶼」といった地名が散見されるが、尖閣らしき島は見られない<sup>(21)</sup>。ちなみに、これらの『一統志』『会典』『実録』、並びに『明史』『清史稿』の正文を検索しても、尖閣諸島への言及は皆無である。ここで中台論客に聞きたいが、自国領と分かっているながら敢えて記載しない正史など、果たして存在し得るだろうか。

### 三、『皇朝中外壹統輿図』及び明清輿図の諸相

『皇朝中外壹統輿図』とは清同治二年（1863）に刊行された31巻に及ぶ全国地図集だ。湖北巡撫胡林翼主持の下、巖樹森や鄒子翼ら幕僚たちが「皇輿全覽図」「大清一統輿図」を基に製作したものであり、『大清一統輿図』という別名を持つ。その南七巻東一から東四まで展開する図面を見ると、福建の「梅花所」から台湾の上端を經由して琉球の「姑米山」に至るまで、「小琉球」「彭佳山」「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤尾嶼」を連ねる一本の線が描かれている<sup>(22)</sup>。中台の論客は、「板蔵湖北撫署景恒楼」という官刻本であることを根拠に、「釣魚島及びその附属島嶼が清朝の版図に属したことを明確に示している」と主張する<sup>(23)</sup>。

これは、地図の局部を切り取って自説を根拠付けようとする牽強附会の言に他ならない。実際に、南六巻から南八巻までの福建省台湾府に関する地理記述を確認したところ、これらの島嶼の名前は全く出てこないし、巻首の総図を見ると、飛石のような島々を連ねる点線が描かれたのは中琉の間だけなので、冊封使や貿易船の航海経路を示すためであろう。実際には、総図には琉球・日本・朝鮮・俄羅斯・越南などの周辺国も描かれており、『皇朝中外壹統輿図』に書き込まれたからと言って、直ちに中国領だと断言するとは強引すぎる。実は翌1864年、同じ湖北官書局から『皇朝中外壹統輿図』を模した『大清一統輿地全図』も刻印されたが、その「福建全図」を見ると、台湾の上端に「小琉球」「彭佳山」「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤尾嶼」がすべて欠落している<sup>(24)</sup>。釣魚島は本当に清国領として官製地図に表記されたなら、僅か一年後、別の官製地図から姿を消したとは考え難い。

ともあれ、明清時代において製作、刊行された輿図が膨大な量に上るが、そのうち、釣魚島を描いたものは例外と言ってよい。以下、明清輿図の代表作を幾つか列挙しておくが、中台側が期待するような釣魚島表記は皆無に等しい。

- \* 「大明混一図」（佚名、洪武二十二年、1389年）<sup>(25)</sup>
- \* 「楊子器跋輿地図」（佚名、正徳七年、1512年）<sup>(26)</sup>
- \* 「大明一統輿図」（桂萼『皇明輿図』、嘉靖八年、1529年）<sup>(27)</sup>
- \* 「輿地総図」「福建輿図」（李黙『大明輿地図』、嘉靖二十六年、1547年）<sup>(28)</sup>
- \* 「輿地総図」「東南海夷図」（羅洪先『広輿図』、嘉靖三十二年、1553年）<sup>(29)</sup>
- \* 「古今形勝之図」（喻時、嘉靖三十四年、1555年）<sup>(30)</sup>

- \* 「王泮識輿地図」(佚名、萬曆二十二年、1594年)<sup>(31)</sup>
- \* 「兩儀玄覽図」(李葆祿、萬曆三十一年、1603年)<sup>(32)</sup>
- \* 「総図」「浙江図」「福建図」(佚名『分野輿図』、万曆二十九年、1601年)<sup>(33)</sup>
- \* 「皇明大一統地図」「万里海防図」(陳組綬『皇明職方地図』、崇禎九年、1636年)<sup>(34)</sup>
- \* 「今古華夷区域総要図」「大明万世一統図」(呉国補、崇禎十一年、1638年)<sup>(35)</sup>
- \* 「華夷古今形勝図」(呉学儼『地図綜要』、崇禎十六年、1643年)<sup>(36)</sup>
- \* 「福建海防図」(佚名、萬曆二十五年、1597年)<sup>(37)</sup>
- \* 「澎台海図」(佚名、約康熙五十三年、1714年)<sup>(38)</sup>
- \* 「明地理志図」(六巖『歴代地理志図』、道光二年、1822年)<sup>(39)</sup>
- \* 「皇輿全図」(鄒伯奇、道光二十四年、1844年)<sup>(40)</sup>
- \* 「大清万年一統天下全図」(呂撫『三才一貫図』、康熙六十一年、1722年)<sup>(41)</sup>
- \* 「大清分省輿図」「福建図」(佚名、乾隆十九年、1754年)<sup>(42)</sup>
- \* 「環海全図」「海疆洋界形勢全図」「台湾後山図」(佚名、乾隆五十二年、1787年)<sup>(43)</sup>
- \* 「輿地全図」(佚名、乾隆五十二年、1787年)<sup>(44)</sup>
- \* 「大清万年一統地理全図」(佚名、嘉慶年間、1796～1820年)<sup>(45)</sup>
- \* 「京板天文全図」「海国聞見録四海総図」(馬俊良、嘉慶年間、1796～1820年)<sup>(46)</sup>
- \* 「大清万年一統天下全図」(佚名、嘉慶十六年、1811年)<sup>(47)</sup>
- \* 「七省沿海全図」(金保彝、光緒七年、1881年)<sup>(48)</sup>
- \* 「大清廿三省輿地全図」(佚名、光緒十一年、1885年)<sup>(49)</sup>
- \* 「七省沿海全図」(邵廷烈、同治五年、1866年)<sup>(50)</sup>
- \* 「皇朝一統図」(輿地学会『皇朝直省地図』、光緒二十九年、1903年)<sup>(51)</sup>
- \* 「大清帝国」(上海商務印書館『大清帝国全図』、光緒三十一年、1905年)<sup>(52)</sup>

輿図の他に、明清地理書にも附図が付き、当時の版図を確かめる重要な手掛かりとなる。以下、差し当たり清代地理書に焦点を絞って見てみよう。『読史方輿紀要』(康熙十七年、1678) と言えば、明末清初地誌学の集大成で、著者顧祖禹は『大清一統志』の編纂に携わったほどの篤学の士である。その「輿図要覧」には、「輿地総図」「九辺総図」「海運図」などの全国図をはじめ、「沙漠海夷図」「福建輿図」などの地図も多数収められているが、尖閣諸島らしき島はどこにも見られない<sup>(53)</sup>。『読史方輿紀要』巻九十九「福建五」の「附考琉球」を読むと、福建—琉球航路について、「自福州梅花所開洋、七昼夜可至。自泉州澎湖島開洋、五昼夜可至。望見古米山、即其境。……又有鷄籠山島野夷、隔鷄籠、淡水洋、亦謂之東番。……從長樂広石出海、隱隱一小山浮雲、即小琉球也。更南則東番諸山」と記し、尖閣諸島の存在に全く触れていない<sup>(54)</sup>。

清代中頃の地理書として広く読まれていた陳倫炯『海国聞見録』(雍正八年、1730) 巻下には、「四海総図」「沿海全図」「台湾図」「台湾後山図」「澎湖図」などの附図が見られるが、いずれも尖閣諸島は描かれていない<sup>(55)</sup>。陳倫炯の著作は後世に大きな影響を与え、上に列挙した清代輿図の中に『海国聞見録』附図の焼き直しが多く含まれている。

清末地誌学者李兆洛は、『皇朝輿地韻編』『歴代地理志韻編今釈』(道光十七年、1837) など古今地名辞典を編集、刊行した業績で知られており、彼の著作は李鴻章の序文というお墨付きを得たほど権威が高い。その『皇朝一統輿図』(道光十二年、1832) を見ると、地球儀型の世界地図や「皇朝輿地図」「福建全図」などの地図を載せているが、いずれも尖

閣諸島が欠如している<sup>(56)</sup>。ちなみに、『皇朝輿地韻編』『歴代地理志韻編今釈』の中身を調べたところ、「釣魚嶼」「黄尾嶼」「赤尾嶼」といった地名は全く出てこない。

魏源の『海国図志』（道光二十三年、1843）と言えば、中国初の本格的な世界地理書で、各国地図を大量に収録している。巻三にある「東南洋各国沿革図」「地球正背面全図」「亜細亞州全図」「東南洋沿海各国図」などを見ても、やはり尖閣諸島は記されていない<sup>(57)</sup>。一方、徐繼畬の『瀛環志略』（道光二十八年、1848）は、『海国図志』の影響を受けて編纂された世界地理の解説書で、43種の世界地図を収めている。そのうち、「地球図」「皇清一統輿地全図」「亜細亞図」「東洋二国図」「南洋各島図」「東南洋大洋海各島図」などでは、台湾が描かれているものの、尖閣諸島は欠落している<sup>(58)</sup>。両書の正文にも尖閣関連の記述がなく、後者の「東洋二国図」の説明文に「由福州之五虎門放洋、用卯針約四十余更、至孤米山、其国之大島也。再東即至其国」との一行が見られる<sup>(59)</sup>。

ところで、中国古地図の逸品として、2008年にオックスフォード大学 Bodleian Library で発見された The Selden Map of China は世の耳目を集めた。この絹製彩色地図は、スコットランド人弁護士、歴史研究者でもある John Selden（1584～1654）の遺言によって、1659年に遺贈された文物だが、明末福建発の海上貿易ルートを克明に描いた航海図として、上で見てきた各種の輿図と趣を異にしている。年代的に海禁が解かれた隆慶元年（1567）以後の製作品と思われるが、日本・琉球・東南アジア各国へとつながる航路（東洋航路 6本と西洋航路 12本）がすべて漳州と泉州から始まるように描かれているため、漳州海澄県の月港が海上交易の一大拠点だった往時を偲ばせる。泉州－琉球の間に飛石のような島々を連ねる航路を表す一本の線が描かれ、線沿いに「甲卯」→「辰」→「乙卯」→「卯」→「乙卯」→「卯」→「乙卯」と船航行の方角を示す羅針盤の針位も書き添えられているが、島名は記されていない。また、福建地名として「福州」「興化」「建寧」「延平」「汀州」「邵武」「泉州」「漳州」という八つの州名だけで、台湾の地名も「北港」「加里林」の二つしかない<sup>(60)</sup>。製作者不明で、地元の海商か船乗りの依頼を受けて作られたものと思われる。いずれにせよ、純粋な商業航海図であり、「普天之下、莫非王土」という中華思想に基づく版図誇示欲や領土拡張欲とは無縁だ。興味深いことに、海道針經『順風相送』『指南正法』の抄本も同じボドリアン図書館に収蔵されており、The Selden Map of China の航路と『順風相送』の航路を照合してみたところ、一致したことが分かる。ともあれ、中台側は自説を裏付ける証拠を全く持たず、釣魚島は『皇朝中外壹統輿図』に描かれたのを最後に清代輿図から姿を消したのである。

#### 四、中国・台湾発行の地図における尖閣諸島の表記

さて、近現代中国で発行された地図に目を転じると、中国側が取り上げた「証拠」とは「中韓日形勢図」一枚のみだ。中国史地図表編纂社が 1945 年 3 月に発行したこの地図に「釣魚島」「黄尾嶼」「赤尾嶼」が描かれているため、自らの領有権主張に利用したわけである<sup>(61)</sup>。その一方で、1920 年 5 月 20 日、中華民国駐長崎領事馮冕が魚釣島石垣村の住民宛てに「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島内和洋島」と記した感謝状を贈った一件に対し、中国側は「台湾と釣魚島が日本植民地支配下に置かれた戦前の出来事で、領有権主張の証拠にはならない」と一蹴した<sup>(62)</sup>。同じ戦前の史料でも、自分にとって不利であれば、その価値を否定する半面、少しでも使えそうと思えば、なりふり構わず利用する。こうした我



田引水の芸当は中台側に多く見られ、枚挙に暇がない。以下、民国初期に溯って、中国と台湾で出版された各種の地図における尖閣表記の有無について調べていく。

先ず、民国元年（1912）校定の中学堂・師範学堂用『中国地理教科書』を見てみよう。巻一「地文地理・二沿海岸線・丙東海之沿岸」、巻三「地方志三・福建」の章節があるが、台湾や尖閣諸島に言及していない<sup>(63)</sup>。民国初期において最も権威ある地図集として、『中華民國新区域図』（1915年初版）が先ず挙げられる。巻頭の「中華民國全図」では、中国本土は彩色を施されているが、台湾は日本・朝鮮半島と同じく無色だ。台湾の東に沖縄の宮古島・石垣島・西表島が描かれているが、尖閣諸島はない。福建地図を見ると、当然ながら台湾すら表記されていない<sup>(64)</sup>。上海申報館が民国二十二年（1933）に発行した『中国分省新図』を調べたところ、「政治区域図」「地形総図」「福建」などの地図があり、台湾は外国領として扱われ、尖閣諸島は見られない<sup>(65)</sup>。また、同年刊行の『中国歴代疆域戦争合図』では、第四五「中華民國五族共和全図」、第五五「中華民國政治区劃図」、又四五「国民軍統一戦事図」などを収録しており、いずれも台湾は日本領に色分けされ、尖閣諸島の表記は欠如している。琉球群島の横に「清同治十三年讓與日本」、台湾の横に「清光緒二十一年讓與日本」といった書き込みが目立つ<sup>(66)</sup>。実は、例の「中韓日形勢図」に台湾の挿図があり、そこには「釣魚島」「黄尾嶼」「赤尾嶼」が欠落している。本図においても、「釣魚島」「黄尾嶼」「赤尾嶼」には「中国領」ないし「台湾属島」などの注記がなく、製図者がこれらの島々を台湾の属島と見做していないことは明らかだ。

引き続き戦後発行の地図も調べてみよう。上海申報館発行の1948年版『中国分省新図』では、「欧亜地形総図」「政治区域図」「地形総図」「福建及台湾」などを収録している。「戦後ポツダム宣言に基づき、釣魚島は台湾の附属島嶼として中国に返還されることになった」という中台側の主張とは裏腹に、台湾は中国領として表記されるようになったものの、その北端に「彭佳嶼」が描かれただけで、釣魚島の「釣」の字も出てこない<sup>(67)</sup>。「戦後訂正第五版」と銘打つこの地図は、翁文灝（行政院長）と丁文江（元中央研究院総幹事、故人）の編纂で、表紙裏に「内政部地図発行許可証 京地字第 0179 号」と記し、歴とした官製地図でありながら、当時、民国政府は尖閣諸島の存在を知らなかったことを示唆している。また、1951年に台湾新生報社から発行された「中華民國全図」及び挿図「台湾省簡図」を見ると、モンゴルまで領域内に書き込まれたにも拘らず、尖閣諸島どころか、「彭佳嶼」すら表記されず、上端の欄外に印字された標語「反攻大陸、還我河山」はひととき目立つ<sup>(68)</sup>。なお、民国五十四年（1965）再版の『中華民國分省詳図』には「全国政区図」「台湾省」などの地図を収めているが、どちらも尖閣諸島の表記は見られない<sup>(69)</sup>。

台湾で発行された地図の中で、『中華民國地図集』（民国五十一年、1962）は最も権威が高い。何せ国防研究院と中国地学研究所の共同出版で、主編の張其昀は行政院教育部長、国民党宣伝部長などの要職を歴任した人物だ。中に「政治区域図」「地形総図」「台湾省地形図」「台湾省行政区域図」「台北基隆図」「台湾海峡図」が掲載され、台湾の最北端は「彭佳嶼」「棉花嶼」「花瓶嶼」三島の表記に止まり、地名索引に「釣魚台列嶼」など見当たらない<sup>(70)</sup>。逆に、同じ国防研究院と中国地学研究所の共同出版で、張其昀主編『世界地図集第一冊 東亜諸国』（1965年10月版）を見ると、尖閣諸島は、「尖閣群島 SENKAKU GUNTO」「魚釣島 Uotsuri」「黄尾嶼（久場島） Kobi-sho」「赤尾嶼（大正島） Sekibi-sho」と日本名・日本語発音で併記した上、先島諸島の一部として「琉球群島図」に書き込まれ、国境

線は「中華民國 CHINA」と記した台湾島との中間にしっかりと引かれているのである<sup>(71)</sup>。

一方、1950～60年代の中国で発行された地図の中にも、こうした「不都合な真実」が多々ある。1953年6月版の『中華人民共和国分省精図』（精装本）には、地形図や政区図の他に台湾省地図・解説もあるが、棉花嶼と花瓶嶼のみ登場し、解説文に「台湾省在我国东南海中、包括台湾、澎湖及其他附属小島」と記し、釣魚島への言及はない<sup>(72)</sup>。同年10月版の『新中国分省図』（袖珍精装本）の台湾省地図を見ると、棉花嶼・花瓶嶼の表記すらなく、解説は全く同じである<sup>(73)</sup>。1960年版の『中国分省地図』では、全国地形図・政区図・交通図・台湾省地図にそれぞれ解説文が添えられている。上の両図と比べ、彭佳嶼の表記が追加されたものの、釣魚島は欠如したままである<sup>(74)</sup>。1962年発行の『中学適用 地図冊』上冊（中国部分）は、「中国行政区」「中国人口」「中国民族」「中国地形」「福建省、台湾省」などの地図を収録しているが、やはり台湾の北端は彭佳嶼までになっている<sup>(75)</sup>。1966年発行『中国地図冊』（普及本）では、「中国政区」「中国地形」「中国交通」の他に「台湾省」地図も見られ、台湾東北の海上に「彭佳嶼」「棉花嶼」「花瓶嶼」が追加表記された<sup>(76)</sup>。このように、1950～60年代中国発行の地図において、どれも釣魚島の表記が存在しないことが分かる。発行元の地図出版社と言え、当時の中国で唯一地図を発行できる国家出版社で、当然ながら当局の領土・領有権認識を反映していると言えよう。

当時の中国地図には南海諸島の表記があっても、尖閣諸島の表記が欠いたのは訳がある。中国政府が1958年9月4日に発表した領海声明を見ると、自国の領土として台湾及び周辺諸島・澎湖列島・東沙群島・西沙群島・中沙群島・南沙群島を羅列し、また中国近海の島として東引島・高登島・馬祖列島・白犬列島・鳥岬島・大小金門島・大担島・二担島・東椛島を挙げた半面、釣魚島に一言も触れていない<sup>(77)</sup>。当時、中国当局の神経が専ら「解放台湾」に集中し、尖閣諸島の存在すら気に留めなかった（知らなかった）ということだ。この事実は、1962年に解放軍画報社が発行した「台湾形勢図」を見てもすぐ分かる。そこには台湾各地の市鎮・山川・鉄道・農業産地・工業施設だけでなく、米台の空軍基地・海軍基地まで詳細に表記され、福建近海の島嶼の中で未だに国民党軍が占拠していた東引島・馬祖島・白犬列島・鳥岬島・金門島・東椛島をクローズアップしている。「反攻大陸」と訴える例の台湾新生報社の「中華民國全図」とは、台湾海峡を挟んで睨み合う中台対立を映し出す好一対を成しているが、地図の最北端はやはり彭佳嶼となっている<sup>(78)</sup>。

では、世界地図の方はどうか。1953年版の『新世界地図集』を見ると、「日本」地図に挿図「琉球群島」があり、そこに「先島諸島 Sakishima Retto」の表記とともに、「琉球群島原属我国後被日本窃據今由美帝佔領應帰還我国」との書き込みが見える<sup>(79)</sup>。ところが、1958年版『世界地図集』では、甲種本も乙種本も「日本」の挿図「琉球群島」において、「尖閣群島」「魚釣島」「赤尾嶼」などの日本名が堂々と使われている<sup>(80)</sup>。しかも甲種本の地名索引を繙くと、御丁寧「Jian 尖閣群島 25-26 Q14」（183頁）、「Yu 魚釣島 25-26 Q14」（231頁）の項目まで用意されている。1960年再版の『世界地図集』甲種本も同じ表記をしている<sup>(81)</sup>。さらに、1969年版『中華人民共和国分省地図』（中国科学院地図研究所編修・国家測繪総局出版）を見ると、第18頁の「福建省・台湾省」において、「魚釣島」「北小島」「黄尾嶼」「赤尾嶼」が「尖閣群島」との日本名で一括りされている<sup>(82)</sup>。中国が1971年に尖閣諸島の領有権を主張し始める直前まで、中国の政府機関が自国の地図表記に尖閣諸島の日本名を使用したことは、日本領として認識していた事実を示唆している。

これらの「瑕疵」に関して、中国論客は「この地図の表紙裏に『一部の国境線が抗日戦争前の申報地図に基づいて描いたものだ』と書いてるじゃないか」と開き直るが<sup>(83)</sup>、言い訳するにしてもお粗末すぎる。確かに『世界地図集』の「編者的話」に「本図集中国部分的国界線、系根據抗日戦争前申報地図繪制」、表紙裏に「中国部分国界線、根據抗日戦争前申報地図繪制」とそれぞれ記し、1960年版『中国分省地図』の表紙裏にも「本図我国国界線根據解放前申報地図繪制」と書いている。しかし、これらのコメントはあくまで隣国との未確定国境線の引き方を指しており、尖閣表記のあり方とは無関係だ。例の『中学適用地図冊』の表紙裏にある「本図冊中国国界線中、有関中国与緬甸和中国与尼泊尔的兩段、根據中緬两国和中尼两国分別在1960年和1961年審訂的边境条約的附圖繪制、其余各段根據解放前申報地圖繪制」との注記を見れば、中国側の歪曲・捏造がすぐばれてしまう。「抗日戦争前申報地圖」とは、恐らく上海申報館1933年版『中国分省新圖』の類を指しているだろうが、百歩譲って、申報地圖の尖閣無表記をうっかりして借用した「不注意」があったとしても、このこと自体は、共産党政府が尖閣諸島は中国史籍に登場した「釣魚嶼」であることを知らず、その存在すら忘れていたという事実を物語っている<sup>(84)</sup>。

#### 五、中国・台湾発行の地図における尖閣表記の改竄

1969年5月、国連のアジア極東経済委員会によって東シナ海における海底石油資源の埋蔵が確認、公表された。折しも日米の間で沖縄返還を巡る交渉が始まったこともあり、日中台など周辺国の関心が俄かに高まり、尖閣諸島の帰属問題が一気に浮上してきたわけである。台湾では、最初この問題を取り上げたのは「政府応堅守立場、據理駁斥」と題する『中国時報』の社説(1970年8月13日付)で、翌1971年6月11日、中華民国外交部が正式に「關於釣魚列嶼主權的声明」を発表した。やや遅れて、1970年12月29日付の『人民日報』に「決不容許美日反動派掠奪我国海底資源」と題する論評が掲載され、翌1971年12月30日には、中華人民共和国外交部も抗議声明の発表に踏み切った。その後、中国・台湾の地図製作・発行における尖閣表記の状況は一変する。

以下、資料収集上の制約を受け、中国の地図事情を中心に検討していきたい。1972年版の『中華人民共和国地図集』を調べると、「中国政区」「中国地形」「江西省、福建省、台湾省」「福建省、台湾省(政区)」の地図において、台湾の東北の海上に「1」「2」の番号が打たれ、各地図の下方に「1 釣魚島」「2 赤尾嶼」の脚注が付けられている<sup>(85)</sup>。そこから、全面改訂・製版に間に合わないため、とりあえず小手先の修正を施した跡が見て取れる。1974年版の『中華人民共和国分省地図集』も、「中国政区」「台湾省」「江西省、福建省、台湾省地形」では、同様に台湾の北に①②の番号が打たれ、地図の下方には「①釣魚島」「②赤尾嶼」の脚注が見られる<sup>(86)</sup>。更に台湾概況の解説に「全省包括台湾島、澎湖列島、釣魚島、赤尾嶼、彭佳嶼、蘭嶼、火烧島等島嶼」という説明を付け加えている。

上記した『世界地図集』の新版も例に洩れず、作為の跡が認められる。1972年初版・1978年再版の『世界地図集』では、「日本」の挿図「琉球群島」から1958年版と1960年版にあった「尖閣群島」「魚釣島」「赤尾嶼」の表記が悉く消え、代わりに「中国東南部」地図において、台湾の東北の海上に①②の番号が打たれ、地図の下方に「①釣魚島」「②赤尾嶼」の脚注が付けられ、台湾省の解説に「……包括台湾島、澎湖列島、釣魚島、赤尾嶼、彭佳嶼、蘭嶼、火烧島等島嶼」と記す<sup>(87)</sup>。また、1972年2月第1版の『世界地図冊』(壘

套本)も同じ扱い方をしている。壁掛け地図として、1971年発行の「中華人民共和国地図」は、「本図中国国界線系根據我社一九六六年出版的『中華人民共和国地図』第五版繪制」「本図行政区資料截止期 1970年12月」と言いながら、やはり台湾の東北の海上に「1」「2」の番号が付けられ、地図の下方に「1 釣魚島」「2 赤尾嶼」の脚注が記された<sup>(88)</sup>。翌1972年発行の「中華人民共和国地図」も同じ表記となっている<sup>(89)</sup>。

さて、1980年代に入ってから、中国発行地図の尖閣表記は番号ではなく、文字で表示するように大幅に改訂された。1983年版の『中国地図冊』（塑套本）では、「台湾省」地図に釣魚島・黄尾嶼・赤尾嶼・南小島を表記し、解説文に北小島も含めて言及した<sup>(90)</sup>。同じ『中国地図冊』（塑套本）の1990年版を読み比べると、「中国地形」にも「釣魚島」「赤尾嶼」の表記が追加された上、「台湾省」地図の上方に「釣魚島及赤尾嶼」の挿図があり、そこには釣魚島・黄尾嶼・赤尾嶼・南小島・北小島の五島が描かれている<sup>(91)</sup>。1982年発行の『世界地図冊』（塑套本）を見ると、「中国東南部」地図に釣魚島と赤尾嶼が記されている<sup>(92)</sup>。また、1984年発行の「日本地図」も、挿図「琉球群島」から「尖閣群島」の文字が消え、地名索引からも「尖閣群島」「魚釣島」の項目が完全に削除された<sup>(93)</sup>。

それだけでなく、歴史地図の編集・発行においても改竄・捏造が公然と行われた。1982年版の『中国歴史地図集』全8冊を調べたところ、第7冊『元・明時期』の「明時期全図（二）」と「福建」には、いずれも「釣魚嶼（東番）」「黄尾嶼（東番）」「赤尾嶼（東番）」を表記し、台湾の古名である「東番」に合致させることで、恰も萬暦年間において尖閣諸島がすでに中国領となった印象をでっち上げる<sup>(94)</sup>。また、第8冊『清時期』の「清時期全図（一）」と「福建」を見ると、「釣魚嶼（福建）」「黄尾嶼（福建）」「赤尾嶼（福建）」の表記に変わった<sup>(95)</sup>。この歴史地図集は、主編の譚其驤をはじめ国内高名な学者の共作と評されているが、国家権力に阿り史実を捻じ曲げた汚点は玉に瑕と言うべきことか。

一方、1972年1月10日、中華民国教育部が台湾の各学校・教育機関・編訳館宛てに「釣魚台列嶼隸屬台湾省宜蘭県」という通達を出し、初めて尖閣諸島の所属する行政区を指定、公表した。それをきっかけに、台湾の各出版社が新版地図に釣魚台列嶼を表示するよう改訂を行った。1974年版の「台湾省地図」を見ると、緑島と蘭嶼の間に「釣魚台列嶼位置図」を配置しているが、1972年版の同地図にはそれがない<sup>(96)</sup>。1983年版の『中華民國分省圖』は、「中華民國全図」と「台湾省」に「釣魚台列嶼」を記し、解説文に「(台湾省)面積包括澎湖、釣魚台兩群島與綠島、蘭嶼、龜山、彭佳嶼、小琉球等小島」と書き足している<sup>(97)</sup>。なお、中華民国行政院新聞局発行『CHINA YEARBOOK』を繙くと、50～60年代版の附図には尖閣表記がなかったが、1975年版ではTHE REPUBLIC OF CHINA地図に「Tiao Yu Tai Lieh Yu (Senkaku Is)」と日台双方の名称を併記している。もう一枚のTAIWAN地図を見ると、「KINMEN」「MATSU」など従来の挿図と並んで「TIAOYUTAI」が追加され、そこに「Tiaoyutai」「Hwangwei Hsu」「Chiwei Hsu」を表示している<sup>(98)</sup>。こうして外交上の必要に迫られて、台湾当局も地図表記の改訂・修正に手を染めたのである。

#### おわりに

以上、中国の古地図における尖閣諸島の表記問題について概観してきた。総じて言えば、星の数ほどある古地図の中に、尖閣諸島が登場したものは極めて例外で、三つのタイプに大別される。一つ目は、使琉球録の「過海図」「針路図」系列で、前述した「封舟出洋順風

針路図」、潘相『琉球入学見聞録』(1764年)の「針路図」などの他に、林子平「琉球三省并三十六嶋之図」もこの流れを汲んでいる。二つ目は、鄭若曾『万里海防図』の系列に属する海防図の類で、『籌海図編』の「福建沿海山沙図」をはじめ、董可威『乾坤一統海防全図』(1592年)、茅元儀『武備志』(1621年)巻二百十「福建沿海山沙図」、施永図『武備秘書』(1628年)巻二「福建防海図」などが挙げられる。そして三つ目は、本稿でリサーチしてきた数点の清代輿図で、いずれも直接的、間接的に徐葆光『中山伝信録』の附図から有形無形の影響を受けて作られた摸倣図に他ならない。どのタイプにせよ、種類も数量も限られており、中国の版図・国境を意識して釣魚島を描いたわけではなく、『順風相送』などの海道針経と同様、あくまで福建—琉球航路を示す意図に基づいたものに他ならない。近現代中国・台湾で発行された地図では、尖閣諸島はもともと沖縄群島の一部として表記されていたが、1970年代に入って領有権問題が浮上してくると、中国も台湾も慌ててそれぞれの自国の海域内に「釣魚島」「釣魚台列嶼」を書き込むように改竄した。恰も自国固有の領土であるかのように見せかけようとする意図は火を見るよりも明らかだ。

## 注

- (1)井上清『尖閣列島—釣魚諸島の史的解明』現代評論社、1972年、43～44頁。
- (2)鄭海麟『釣魚台列嶼—歴史與法理研究 増訂本』明報出版社、2011年、266～268頁。
- (3)林子平『三国通覽図説』「題初」、『林子平全集』第二巻、生活社、1944年、230頁。
- (4)林子平「琉球三省并三十六嶋之図」、井上清前掲書の添付地図。また、デジタル画像：  
[http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yuc-rare/views/WC-1\\_19.html?l=1&n=0](http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yuc-rare/views/WC-1_19.html?l=1&n=0)
- (5)前掲『尖閣列島—釣魚諸島の史的解明』、44頁。
- (6)デジタル画像：[http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yuc-rare/views/WC-1\\_26.html?l=1&n=0](http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yuc-rare/views/WC-1_26.html?l=1&n=0)
- (7)例えば、岡山大学図書館池田文庫所蔵の「琉球三省并三十六嶋之図」(T10-25)、「朝鮮八道之図」(T10-32)はいずれも単色。
- (8)「接壤図略」、岡山大学図書館所蔵写本『三国通覽図説』五巻附図(文政六年(1823)、山名晋、書写地不明)。図面に「諸国接壤の形勢を見る為の小図 仙台林子平図」と記す。
- (9)曹婉如等編『中国古代地図集・清代』文物出版社、1997年。No.53「封舟出洋順風針路図」。恐らく製図者の意図として、平原を橙色、山地を藍色で色分けしたのであろう。
- (10)同上、No.52「坤輿全図」(蔣友仁)。また、国家図書館中国边疆文献研究中心編『文献為証 釣魚島図籍録』国家図書館出版社、2015年、124～125頁。
- (11)呉天穎『甲午戦前釣魚列嶼帰属考』中国民主法制出版社、2013年、128～129頁。
- (12)前掲『中国古代地図集・清代』、No.153「皇輿全覽図」、No.157「雍正十排図」、No.168「乾隆十三排図」、No.170「乾隆十三排図」局部(福建沿海)。
- (13)中国边疆史志集成『大清一統輿図』「前言」全国図書館文献縮微複製中心、2003年。
- (14)同上『大清一統輿図』、『清代一統地図』(台湾国防研究院印行、民国55年)、30図「庫葉島」、61図「威興、皇州」、71図「対馬、巨濟」、81図「福州府、金華府」、91図「台湾府、漳州府」を参照。
- (15)曹婉如等編『中国古代地図集・明代』文物出版社、1994年。No.77「坤輿万国全図」。デジタル画像：  
[https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/7/71/Kunyu\\_Wanguo\\_Quantu\\_%28%E5%9D%A4%E8%BC%BF%E8%90%AC%E5%9C%8B%E5%85%A8%E5%9C%96%29.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/7/71/Kunyu_Wanguo_Quantu_%28%E5%9D%A4%E8%BC%BF%E8%90%AC%E5%9C%8B%E5%85%A8%E5%9C%96%29.jpg)

- (16)前掲『中国古代地図集・清代』No.4「坤輿全図」（南懷仁）、No.144「坤輿全図」局部。デジタル画像：[http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~vcu-rare/views/WCJ\\_11\\_1-8.html?l=1&mp](http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~vcu-rare/views/WCJ_11_1-8.html?l=1&mp)
- (17)鞠徳源「蒋友仁繪坤輿全図」、前掲『中国古代地図集・清代』、123頁。また、「ゴーベル琉球図1758年」、ドイツ東洋文化研究協会『西洋人の描いた日本地図』、1993年、163頁。
- (18)李賢等撰『大明一統志』三秦出版社、1990年、（上）1頁、（下）1144頁。
- (19)『大清一統志五百卷』光緒辛丑秋上海寶善齋石印、卷首、卷三二四、卷三三五。
- (20)王雲五主編『嘉慶重修一統志』台湾商務印書館、1966年、卷一（一）、卷四二四（八）、卷四三七（九）。
- (21)『欽定大清會典』光緒己亥巧秋上海書局石印、卷六十三「兵部職方清吏司」。
- (22)「皇朝中外壹統輿図」、前掲『文献為証 釣魚島図籍録』、152～155頁。デジタル画像：[https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11\\_00335/ru11\\_00335\\_0005/ru11\\_00335\\_0005\\_p0068.jpg](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11_00335/ru11_00335_0005/ru11_00335_0005_p0068.jpg) 綜録検索：[https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11\\_00335/](https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru11/ru11_00335/)
- (23)中国國務院新聞弁公室『釣魚島是中国的固有領土』人民出版社、2012年、5頁。また、前掲『甲午戦前釣魚列嶼帰属考』、130～132頁。
- (24)『福建全図』、方堃等編著『中国沿海疆域歴史図録』東海卷下、黄山書社、2017年、438～439頁。
- (25)前掲『中国古代地図集・明代』、No.1「大明混一図」。
- (26)同上、No.12「楊子器跋輿地圖」、No.13「楊子器跋輿地圖模繪本」。
- (27)同上、No.187「大明一統輿図」
- (28)「輿地総図」『大明輿地圖』、前掲方堃等編著『中国沿海疆域歴史図録』総卷上、37～39頁。
- (29)前掲『中国古代地図集・明代』、No.147「輿地総図」、No.155「東南海夷図」。
- (30)同上、No.139「古今形勝之図」
- (31)同上、No.60「王泮識輿地圖」。
- (32)同上、No.58「兩儀玄覽図」、No.57「兩儀玄覽図」（東亜部分）。
- (33)「総図」「浙江図」「福建図」、方堃等編『中国沿海疆域歴史図録』総卷上、94～95頁。
- (34)前掲『中国古代地図集・明代』、No.231「皇明大一統地圖」。
- (35)同上、No.94「今古華夷区域総要図」、No.96「大明万世一統図」。
- (36)同上、No.239「華夷古今形勝図」。王自強編『明代輿図綜録』（星球地圖出版社、2007年）を参照。
- (37)「福建海防図」、孫靖国著『輿図指要』中国地圖出版社、2012年、324～333頁。
- (38)前掲『中国古代地図集・清代』、No.11「澎台海図」、No.12「澎台海図」局部（台湾府）。
- (39)同上、No.83「明地理志図」。
- (40)同上、No.189「皇輿全図」。
- (41)前掲方堃等編著『中国沿海疆域歴史図録』総卷下、264頁。
- (42)同上、266～267頁。
- (43)同上、276～295頁。
- (44)同上、298～303頁。
- (45)同上、310～316頁。
- (46)同上、318～327頁。
- (47)同上、340～344頁。
- (48)同上、470～479頁。
- (49)同上、494～495頁。
- (50)同上、446～447頁。

- (51)中国測繪科学研究院編纂『中華古地図珍品選集』哈爾濱地圖出版社、1998年、255頁。
- (52)同上、249頁。
- (53)顧祖禹『讀史方輿紀要』十二、「輿地要覽」中華書局、1998年。卷一「輿地総図」5528～5529頁。  
 卷二「福建輿図」5902～5903頁。卷三「九辺総図」6030～6031頁。卷四「海運図」6193～6194頁、  
 卷四「沙漠海夷図中」6246～6247頁。
- (54)同上、『讀史方輿紀要』九、卷九十九「福建五」4572～4573頁。
- (55)陳倫炯『海国聞見録』卷下、王雲五『四庫全書珍本五集』台湾商務印書館1頁、3頁、22頁、24頁。
- (56)李兆洛『皇朝一統輿図 歴代紀元編』光緒二十四年戊戌三月(1898年)、掃葉山房校印。
- (57)魏源『海国図志』(上)岳麓書社、1998年、47頁、71頁、77頁、87頁。
- (58)徐繼畬、余思詒『瀛環志略・航海瑣記』中華全国図書館文献縮微複製中心、2000年、巻一10頁、15頁、  
 17頁、19頁、巻二32頁、53頁。
- (59)同上、巻一22頁。
- (60)The Selden Map of China のデジタル画像：<http://seldenmap.bodleian.ox.ac.uk/>。
- (61)金擎宇、張範成、金立煌編繪「中韓日形勢図」、前掲『文献為証 釣魚島図籍録』、174～175頁。
- (62)劉江永『釣魚島列島帰属考：事実与法理』人民出版社、2016年、515頁。現在、沖縄県石垣市八重山博物館に保管されているこの感謝状の文面から、「尖閣諸島は台湾ではなく、沖縄県八重山郡に属する島」という中華民国外交官の領有権認識が読み取れよう。
- (63)屠寄編纂『中国地理教科書』(民国元年校定)商務印書館蔵版、民国二年十一月第13版、巻一46頁、  
 巻三127～134頁。
- (64)童世亨著『中華民国新区域図』中外輿図局出版、商務印書館発行、民国六年十月第4版。
- (65)丁文江、翁文灝、曾世英編纂『中国分省新図』上海申報館、民国二十二年初版、二十三年再版、「福建」24頁。なお、図中の澎湖列島に「清光緒二十一年與台湾同讓於日本」と記す。
- (66)歐陽纓編製『増訂中国歴代疆域戦争合図』武昌亜新地学社、民国二十二年九月第3版。なお、同じ武昌亜新地学社発行の『中華国恥地図』(1931年)を見ると、やはり台湾・琉球の横に日本に割讓された経緯についての書き込みがあり、「東沙島」「西沙群島」の表記も見られるが、尖閣諸島はない。前掲方堃等編著『中国沿海疆域歴史図録』総巻下、498～499頁。
- (67)翁文灝、丁文江、曾世英編纂『中国分省新図』上海申報館、民国三十七年、1～2頁、3～4頁、5～6頁、  
 25～26頁。巻末「地名索引」にある「釣魚台」は松江省の地名。ちなみに、民国二十二年初版『中国分省新図』と見比べると、南海諸島の表記には大きな変化が見られた。初版では「東沙島」「西沙群島」しか描かれていないが、民国三十七年版では「中沙群島」「南沙群島」の附図が追加された上、西沙群島の各島の名称はすべて英語の音訳から現在も通用する中国名に変更された。
- (68)台湾新生報印行「中華民国全図」1951年。国立台湾博物館主編『地図台湾 四百年來相關台湾地図』南天書局有限公司、2007年、160～161頁。
- (69)蔡正倫編『中華民国分省詳図』(内政部審定：第1649号地図発行許可証)宜文出版社、民国五十四年。
- (70)張其昀主編『中華民国地図集』国防研究院印行、與中国地学研究所合作、民国五十一年十月出版。
- (71)デジタル画像：<https://blog.goo.ne.jp/hm-library/e/c9197cd28c7fea010747429e41e0b1ce>
- (72)亜光輿地学社編製『中華人民共和国分省精図』地図出版社、1953年6月第6版。
- (73)世界輿地学社編製『新中国分省図』(袖珍精装本)地図出版社、1953年10月第18版。
- (74)地図出版社編製『中国分省地図』地図出版社、1960年3月第1版。
- (75)地図出版社編製『中学適用 地図冊』上冊(中国部分)、1962年2月第1版。

- (76) 地図出版社編製『中国地図冊』（普及本）地図出版社、1966年1月第1版。
- (77) 「中華人民共和国政府關於領海的声明」『人民日報』1958年9月5日。
- (78) 解放軍画報社印制「台湾形勢図」1962年7月。前掲『地図台湾四百年來相關台湾地図』、162頁。
- (79) 地図出版社編製『新世界地図集』地図出版社、1953年12月修訂3版。
- (80) 地図出版社編製『世界地図集』甲種本・乙種本、地図出版社、1958年11月第1版。
- (81) 地図出版社編製『世界地図集』甲種本、地図出版社、1960年4月第1版。
- (82) 劉江永前掲書、口絵図 8-6、図 8-7、521～522頁。さすがに劉江永も「若干の瑕疵あり」と渋々認めざるを得ない。デジタル画像：<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senkaku/pdfs/senkaku.pdf>
- (83) 劉江永前掲書 519頁。なお、1953年1月8日付『人民日報』に掲載された論評「琉球群島人民反対美国占領的鬭争」の一件に関しても、劉江永は詭弁を弄する。「琉球群島散布在我国台湾東北和日本九州島西南之間的海面上、包括尖閣諸島、先島諸島、大東諸島、沖繩諸島、大島諸島、土噶喇諸島、大隅諸島等七組島嶼」という論評の冒頭部分に対し、彼は「調べたところ、これは日本語資料からの翻訳で、しかも署名なし。故に中国政府の立場を代表したものではない」と負け惜しみが強い。『人民日報』と言えば、中国共産党中央委員会の機関紙で官製メディアの元締めである。たとえ「資料」であっても検閲済の掲載に違いない。内容的にも米軍基地反対運動を行う沖縄住民を声援するもので、当局の主張を代弁しているはずだ。この一文からも、当時、中国政府が尖閣諸島を沖縄領（従って日本領）として見做していた事実が窺える。劉江永前掲書 517頁。
- (84) もう一つ傍証を挙げよう。2012年9月15日、中国国家海洋局が「釣魚島及部分附属島嶼地理座標」を公布したが、来荷初編『中国地名索引』（新知識出版社、1955年）、H.C.Tien 等編『中国地名表』（ORIENTAL BOOK COMPANY, Hong Kong, 1961年）を検索したところ、「釣魚島」の項目はない。
- (85) 地図出版社編製出版『中華人民共和国地図集』1972年10月第1版。
- (86) 地図出版社編製出版『中華人民共和国分省地図集』1974年10月第1版。
- (87) 地図出版社編製出版『世界地図集』（精装）1972年12月第1版、1978年5月第2版。
- (88) 地図出版社編製出版『中華人民共和国地図』1971年12月第6版。
- (89) 地図出版社編製出版『中華人民共和国地図』1972年6月第3版。
- (90) 地図出版社編製出版『中国地図冊』（塑套本）1983年9月第5版。
- (91) 地図出版社編製出版『中国地図冊』（塑套本）1990年12月第7版。
- (92) 地図出版社編製出版『世界地図冊』（塑套本）1972年7月第2版、1982年8月第4次印刷。
- (93) 地図出版社編製出版『日本 Nippon』1976年8月第1版、1984年6月第5次印刷。この地図では、日本の北方領土に「蘇占」（ソ連による占領）と記し、当時中国の対日観・対ソ観の一端が窺える。
- (94) 譚其驥主編『中国歴史地図集』地図出版社、第七冊「元・明時期」、1982年10月第1版、42-43「明時期全図（二）」、70-71「福建」。
- (95) 同上、第八冊「清時期」1987年4月第1版、3-4「清時期全図（一）」42-43「福建」。
- (96) 陳逸人編「臺灣省地圖」南華出版社有限公司、民国六十三年版。民国六十三年版地図のデジタル画像：[https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product\\_id=229570918](https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=229570918)
- (97) 莫先熊著『中華民國分省圖』生力出版社、民国七十二年六月。1頁、2頁、7頁。
- (98) CHINA YEARBOOK 1975, CHINA PUBLISHING CO. P.O.Box 337, Taipei, Taiwan.

附記：本論文は、山陽学園大学平成30年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここにて厚く謝意を表す。